

氏 名	ノ 魯 ^{ビョン} 炳 ^ホ 浩
学位(専攻分野)	博 士 (人間・環境学)
学 位 記 番 号	人 博 第 342 号
学位授与の日付	平 成 18 年 9 月 25 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研 究 科 ・ 専 攻	人 間 ・ 環 境 学 研 究 科 共 生 文 明 学 専 攻
学位論文題目	吉野作造と丸山眞男 ——「民本主義」と〈永久革命〉、その交錯と分裂——

論文調査委員 (主 査) 教 授 佐伯啓思 教 授 西井正弘 助教授 大澤真幸 教 授 米原 謙

論 文 内 容 の 要 旨

本博士学位申請論文は、日本政治思想のなかで大きな役割を果たした吉野作造と丸山眞男というふたりの知識人を比較し、両者の思想の意味を論じるものである。吉野作造は大正から昭和にかけて言論活動を展開し、丸山眞男は主として戦後、多くの雑誌媒体や書物を通じて言論活動を展開した。活動の時期は異なっているものの、両者とも、西欧の政治思想の強い影響のもとに、日本の民主主義思想の展開において大きな役割を果たした。しかも、両者とも、西欧から導入された民主主義の概念と、「日本」という土壌あるいは風土との関係について思索をめぐらせたという点でも共通する問題意識をもっていた。本論文は、このような前提に立って、西欧思想としての民主主義の理解、および、それとの対比における「日本」という問題について、吉野と丸山の思索の後を追ひ、両者の思想と知識人としてのあり方を論じるものである。

本論文の第一章では、丸山に対する吉野の影響関係が論じられる。丸山眞男が東京大学法学部に入学した1934年の前年に吉野作造は死去しているので、吉野の丸山への直接的な影響はないものの、当時の東大法学部において吉野が残した足跡、および丸山が少年期より個人的に強い影響を受けていた長谷川如是閑を通じて、吉野の考え方や知識人としての生き方は、間接的ではあるが、丸山に大きな影響を与えたことが論じられる。

第二章においては、吉野における政治思想の発展と「民本主義」へ行き着く思想的な経緯が論じられる。初期の吉野の代表的な著作である『ヘーゲルの法哲学の基礎』が、穂塚陳重や小野塚喜平次の影響下にあつて未だに国家学派の下に置かれていたのに対して、1910年から1913年にかけての欧米留学が転機となり「民本主義」の観念を生み出すと申請者は論じる。この時代は、西欧においてはちょうど民主主義運動の高揚期であると同時に、民衆運動の時代でもあり、西欧における民衆運動の見聞が、帰朝後の日本における山本権兵衛内閣に対する民衆の示威運動と重なって「民本主義」へといたる、というのが申請者の理解である。

第三章では、「民本主義」の内容について踏み込んだ検討がなされる。西欧留学の経験、とりわけ民衆的示威運動の見聞という直接的経験が、民本主義における政治目標としての「自由」に力点をおいていたのに対して、吉野は、その関心を徐々に現実的な制度論へと移してゆく。この、現実の日本という時間と場所の制約をもった状況のなかでの制度論への関心が、吉野の思想の大きな特徴となっている。また、後年の吉野の思想のもうひとつの特徴は、「時勢」や「大勢」という概念の重視にあり、そのことが、「民本主義」における状況論的な関心を示している。さらにその考えの背後には、吉野自身、大きな影響を受けたと述べる荘子の影響があったことが論じられる。

第四章では、丸山眞男における「民主主義」論が展開されるが、その際、特に、1960年の安保闘争という契機の中で、民主主義がもつことになった独特の意味が主として論じられる。丸山は、吉野とは違って、民主主義を制度論としてではなく、むしろ制度の自己目的化を批判する姿勢において理解し評価する。このような丸山の民主主義理解は、60年安保における民主主義擁護という立場に見ることができる。つまり、制度論や法律論における安保闘争敗北論に対して、丸山は、「手続き論」として安保闘争を評価することになる。また、安保後の外遊が丸山の立場に転換をもたらしたと申請者は論じる。外遊

後の丸山は、その進歩主義的な普遍的歴史観を修正し、後の「日本の古層」論へいたる「原型（prototype）」の概念を使用するようになる。

第五章においては、丸山の民主主義論のキーワードとしての「永久革命」の概念が検討される。丸山の永久革命の概念は、たとえばトロツキーの「永続革命」とは違い、社会主義へといった社会革命ではなく、あくまで民主主義の理念を現実化してゆくたえざる運動の過程と理解される。ここに、「理念」を実現する「運動」の「過程」としての民主主義という丸山の民主主義理解が浮き彫りにされるが、この意味での民主主義は、ギリシャの太古から常に存在したものであり、ある歴史段階に限定されるものでもなく、ある制度的実体として理解されるものでもない、と申請者は述べる。

第六章において、以上の分析を踏まえて吉野の「民本主義」と丸山の「永久革命」が対比的に論じられる。論点のひとつは、両者におけるヘーゲルの影響の異同である。吉野においては、ヘーゲルの歴史を支配するロゴス（理性的なもの）の役割に大きな比重が置かれているのに対して、丸山においては、ヘーゲルの歴史観を適応しようとすればするほど日本的な「歴史相対主義」があらわになる、というディレンマが生じてくる。丸山は、『日本政治思想史研究』において、徳川期の日本にヘーゲルの歴史観を持ち込もうとし、また、近代日本に西欧の歴史観の導入を試みたが、実際にそこで明らかになるのは、「古層」を流れる「日本的」な歴史像であった、と論じられる。

以上のように、西欧思想の受容と西欧体験を軸にして、日本の民主主義思想の形成に大きな役割を果たした吉野作造と丸山眞男を比較することによって、ヘーゲルの西欧思想や進歩的歴史観を導入した日本の近代化が直面した問題を浮き彫りにするのが、本論文の意図である。

論文審査の結果の要旨

日本政治思想の文脈において、吉野作造と丸山眞男が重要な位置を占めることは論をまたないであろう。したがって、この両者の思想家についての先行研究もかなりの分量になる。とりわけ丸山眞男に関しては、近年、その著作集や講義録などが公刊されたこともあり、続々と研究書が刊行されている。一つの理由は、死後十年たって、丸山眞男もある程度、歴史上の思想家とみなされるようになったことがあげられるであろう。と同時に、戦後六十年が経過して、丸山の名と共に語られることの多い、いわゆる戦後民主主義の達成した成果、もしくは帰着した問題について、改めて関心が向けられているからであろう。

通常、吉野作造は大正デモクラシーの思想家とされ、丸山眞男は戦後民主主義の思想家とみなされている。共に近代日本の民主主義の展開において重要な役割を果たした知識人とみなされている。しかし、いうまでもなく両者の生きた時代背景は大きく異なっており、当然ながら両者が引き受けた課題は異なっている。と同時にまた、両者にはある共通の問題関心もあった。それは、近代日本の知識人の宿命というべきもので、西欧の思想を背後にもった近代民主主義や自由の思想をいかにして日本の文脈に適合させるか、という問題であった。そこで、この両者の思想や思想形成を比較することによって、近代日本の知識人の直面した共通の課題に対する両者の異なった回答を鮮明に描き出せるのではないかと考えられる。本論文はまさにそのような関心をもって書かれたものであり、日本政治思想研究の中でもきわめて独自の位置を占めるものと思われる。

本論文の意義を次の四点において評価しておきたい。

第一に、すでに述べたように、吉野と丸山を比較検討することによって、この両者の直面した共通の課題と、また、それに対する対応の相違を浮き彫りにすることができ、両者の思想の意味が鮮明に理解できる。吉野については、すでに三谷太郎や岡義武、坂本多加雄などによる専門的な研究があり、丸山については、これも既述のように、近年、続々と研究書が登場している。本論文は、吉野や丸山の著作を丹念に読破するのは当然としても、これらの先行研究も綿密に読み、それらの成果を検討した上で書かれている。むしろ、本論文は、吉野や丸山個人の思想の全体像についての研究論文ではなく、あくまで、近代日本の民主主義思想の展開における両者の思想の比較研究を目指すものであるため、吉野や丸山の思想のトータルな検討を施しているわけではない。しかし、一つの視角からする思想家の比較研究は貴重なものであり、また、日本の民主主義の展開をめざす近代日本知識人という視点に焦点を絞ることによって、両者の思想の意味がきわめて鮮明となった。

第二に、吉野と丸山の思想的立場の相違のひとつの理由を、両者の欧米留学体験に求めるという斬新な考えが本論文では

提示されている。すなわち、吉野の留学体験が、とりわけヨーロッパ（ドイツ、オーストリアなど）における民主主義運動や大衆的示威運動に強い影響を受けたものであり、彼の「民本主義」が、その体験のもとに、当時の日本の民主化の動きと連動して作り出された思想であるのに対して、丸山の欧米遊学が、60年安保の終結後であることは、両者の思想的位相を評価するうえで大変興味深い。丸山においては、すでに、「戦後民主主義運動」の思想家としての立場を確立した後の遊学体験だったのであり、とりわけアメリカでの体験は、丸山の思索に大きな転換をもたらした、という。言い換えれば、それ以前の丸山は、いわば書物を通した観念的次元において西欧思想や民主主義の理念を受け止めていたのであり、それが、遊学体験の後には、急速に、日本の民主主義の形成に対して悲観的となり、日本社会の特殊性というべき「古層」論へと傾いてゆく、という指摘は興味深い。

第三に、丸山の民主主義論の核心を「永久革命」の概念で理解するという試みは、先行的試行がないわけではないが、かなり独自のものである。そこで、民主主義を、時代と空間の制約を逃れた普遍的な永久の運動と理解することによって、近代日本に民主的な政治の制度や枠組みを実現しようとする吉野の「民本主義」との相違が明確になる。しかもそれだけではなく、丸山のもっていた歴史観を、ヘーゲル的なそれや、また、コジェーブやフクヤマの「歴史の終わり」論と比較することが可能となっている。

第四に、両者の思想の比較研究によって、近代日本の知識人が直面していた課題の普遍性が明らかになると共に、その問題に対する両者の立場の違いが明確にされている。西欧思想や西欧政治制度の日本への導入は、吉野においても丸山においても逆に「日本的なもの」へ直面する結果となった。吉野は、そこに荘子的な自然意識を持ち込み、「時勢」「体勢」という概念を駆使することで、この問題を処理した。丸山は、「日本の古層」や相対主義的な日本の歴史意識に直面し、西欧的な意味での日本の民主化に対して悲観的になってゆく。この点は、たいへん興味深い指摘であり、今後のいっそうの研究の広がりへと期待が膨らむものである。

以上のように、本論文の意義は、西欧文明に直面した日本の知識人が、西欧文明との格闘の中から、近代的政治制度や政治意識を確立してゆく過程を思想家の比較研究によって明らかにしたものである。同時に、その課題は、決して過ぎ去ったものではなく、まさに現代日本にまで引きつがれたものであることを本論文は示している。このように、本論文は、西欧文明に直面した近代日本の問題意識を引き継ぎつつ、現代日本の政治社会における思想的・制度的課題を正面から扱っている。

よって本論文は、博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成18年7月19日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。